

タイより初まれる歴史的生成的研究はこゝでは顧られてはゐない
いはんや實踐ヘーゲルに至つては尙更である。

ベテカを手にしたものは必ずやその山河の起伏の中に花と果實
の香を想像をもつて満たすであらう。この書は正にこの華やかな
想像に對して自由を興へてゐると思はれる。この書の一部第二卷
の後半の邦譯の今こゝに出でし事をこゝに諸彦と共に喜び譯者の
勞を多とするものである。尙その完譯の出でん事を併せて祈るも
のである。(中井)(理想社發行、貳圓八拾錢)

宗教の史實と理論

宇野圓空著

本書は我國現代著名の宗教學者東京帝國大學助教授宇野圓空氏
が過去二十餘年に亘りて研究の中に、時にふれて發表せられたる
論文を巧に系統づけて編み上げたものである。其の序文にもこ
とわつてある通り古きは大正元年に新らしきは昭和五年に書かれ
しものを、又雜誌に新聞に載せられたるものであるから筆致必ず
しも一貫してゐるとはいへぬし、始めより篇を起して目論見を立
てたものでないだけに夫れ夫れの時期に部分的に扱はれた問題の
集成ではあるが、よく之れに筆を補してすつと一致した一卷にま
とめられてある。

本書は前後二篇に分ち、前篇に收むる所は十一章で(1)宗教の形
態と本質、(2)宗教と科學との對立、(3)宗教學と宗教哲學、(4)宗教
民族學の興起、(5)宗教現象學の一形式、(6)神聖の意識とその内容
(7)宗教的情操の内容及基礎、(8)信念の心理學的特徴、(9)宗教に

於ける人格的態度、(10)宗教的欲求の理論、(11)宗教的集團に於ける
感情に分たれてある。これを出來るだけ宗教民族學の傾向を以て
終始説明せんとの心持が動いてゐる。論文は種々の學說の紹介
や批評があるが、宗教學の研究方法は其の研究の大部分を所謂宗
教心理學に負うてゐるけれども、人間生活の宗教現象につきての
一考察をなすべき一方法にすぎない。又宗教の本質と表現と活動
とを説明する目的のためには、宗教史上の事實の比較的總合的研
究たる比較宗教學から出發するだけによりても満足でない。宗教
史と共に宗教心理學の研究の一役が夫れに働いてこれ等の供給す
る事實を材料として宗教其ものの統一の説明をなさねばならぬ。

そこに普遍的法則の發見を促さればならぬ。さりながら宗教は一
つの原理をもつて總てに押しすゝめて考へられぬ。即ち宗教の諸
形態を認めて集團の變遷や教義の解釋を以てのみ動かさるべきで
なく、此等の集團や個人の宗教的機能の研究する必要がある。つま
り祭祀や禮拜等の普通の宗教的行動でも、他の生活現象や動機が
行はれるから、道德政治經濟等の活動との相互作用に注目しつゝ、
此れに宗教的態度や調子を興へるべきが宗教の存在である。もし
斯様な有様だとすれば、社會生活に於ける宗教が他の要素と相關
聯して見るには原始生活の方が文化が十分でないだけに都合がよ
い。高等宗教をみるには原始宗教の狀態と比較しなければならぬ
し、原始宗教の事實は比較宗教への發達をみるには都合よきもの
である。現今はすでに高等宗教は相當充實して居るに拘はらず原
始宗教の事實はまだまだ開拓さるべき領域が多い。民族學的研究

によるべき道程もなかなか多いわけである。かゝる處に宗教民族學の特色を荷ふ所以である。

後篇はかゝる前篇の意をうけて宇野氏独自の立場で、縦横に又該博に南洋土人の宗教の狀態を書き整へてゐる。十二章より二十一章に及んで、(1)靈魂觀念の發生、(2)靈魂と靈質、(3)靈魂の種類と分化、(4)三章にては土人の靈魂に對する觀念を個々に比較研究してゐる。(5)不死の觀念、(6)來世の觀念の發達、に於いては、輪廻轉生や賞罰應報や復活、再現の欲求、又は天國と地獄の問題等を史實に照して印度、エジプト、ペロニア、ギリシャあたりにも及んで彼此比較を試みてゐる。(7)宗教的儀禮とその態度、(8)呪術の發生、(9)呪術行爲の原型、にありては宗教的經驗や活動の重要な部分が行爲に現はるゝこと及び此れに呪術的な效果の加はるゝことを述べてゐる。そして供儀密儀祈禱など文化史のいづれかの一役を現はしてゐることや、神と合一を目的とするには實利的な慾求の現はれてゐるけれども又聖なる思の直接の現はれてゐると述べてゐる。(20)苦行の意義として禁欲の形式、方法、動機、結果などの一章を加へ、(21)宗教の社會的表現、にてさらにふりかへりて宗教的生活と社會的協同とよりして宗教活動が個人の慾望を動機とするもの、中相互類似によりて團體組織をなすものと、社會自らが活動する特殊の宗教團體とを分ちて宗教の社會學の見解を述べてゐる。

以上本書は個々の題目を部分的に取扱ひつゝ、大般に互りて其の理論を連絡せる處に本書の表題をよくあらはしてゐる。先に出版

された宗教民族學の中へ到らんとする意味に於て誠に結構なる論文集であるといへる。(阿部)

(同文館發行、定價參圓貳拾錢)

現象學概説附精密論理學瞥見

大關將一著

廣義の哲學に關する歐米の名著の翻譯や邦人の有益なる論著を數多く出版して、世人に學益を興へつゝある理想社出版部に於て新たに新興哲學叢書が計畫され、その第一冊として大關氏のこの著が出版された。

我が國で現象學を叙説し、或は概論した著述は既に其の數が少くないが、初學の人々の手引となり、その上、現象學とは如何なるものであるかといふことを、あまり哲學的素養の深くない人々に、はつきり把握させるのに適當したものは缺乏して居たやうに思はれる。本書は著者の自序にある通り、「これから現象學の研究をなさんとする人の手引となること、現象學とはいかなるものかを知らんとする人に現象學の概觀を興へること、の二つを目的」としてフツセルの考へ方に専ら即して起筆されたものである。その爲に文章は非常に平明に理解しやすく書いてあつて、時としてやゝ繁雜だと思はれるほど叮嚀であるから、著者の目的は先づ達せられたものと言つても良からうと思はれる。又終りにフツセルの著書を紹介し、邦人の斯の學に關する諸著を簡単に紹介してゐるのは、入門書としての本書にふさはしい處置には違ひがな